

災獣たちの楽土2
かく やく
赫奕の怒り

尾白未果

Mika Ojira

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵
挿画
深遊
地図
平面惑星

目次

あとがき	終章	第四章	第三章	第二章	第一章	序章
250	243	193	154	69	15	7

災獣たちの楽土2

かくやく 赫奕の怒り

依守也

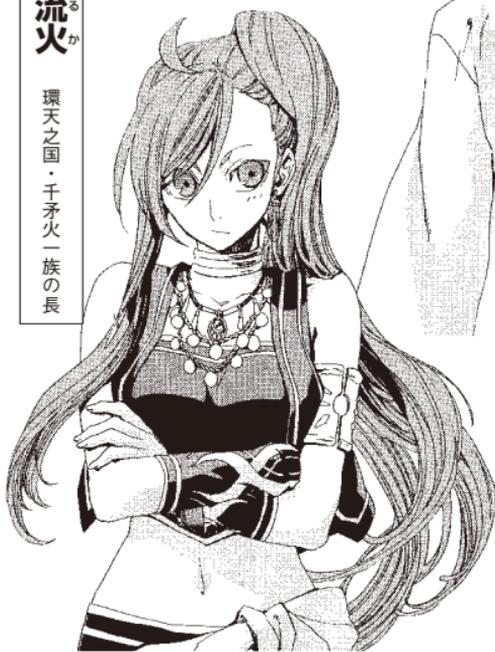
雑古之国の役人



登場人物
紹介

流火

環天之国・千矛火一族の長



太於

依守也の飼い犬



斗具留

依守也の上司



阿麻名

依守也の上司



- とまり 渡真利…… 薙古の商人
うりむ 宇留牟…… 薙古の將軍
はに 巴二…… 阿麻名の妻
れんじ 蓮兒…… 千矛火の前族長の夫
りんか 輪火…… 流火の妹
しゆえ 朱映…… 流火の馬
びやくえ 白映…… 輪火の馬
せく 世紅…… 千矛火の一族
しき 賜稀…… 輪火の婚約者
ちむか 千矛火…… 環天の一族
よみ 呼水…… 環天の一族
くな 駆納…… 環天の一族
もよ 茂葉…… 環天の一族

嵐火

流火の妹



震魚
しんぎょ

雑古の災獣



焰馬
えんば

環天の災獣



りっかのくに
律花之國



かんづちのくに
神槌之國

よしまきのくに
芳巻之國

かんてんのくに
環天之國

なぎふるのくに
雑古之國

五島関係図



序 章

「なあ……俺さあ、もう嫌になつちやつたよ。早く
帰りたいよお」

依守いず也やは半べそをかいて、赤い砂の上に崩れ落ち
た。

喉のどをぜえぜえと鳴らしながら、虚うつろな目で周囲を
見渡す。

右を見ても左を見ても、真まつ赤な砂漠が地平線の
彼方まで広がっている。

果ての見えない砂漠には、地層の重なりを見せる
巨大な赤い岩が点在している。だが、動くものの姿
はなく、貧弱な草木がまばらに生えているだけだ。

この赤い大地に照りつける日の光はあまりにも強
烈で、顔を上げる気力も湧いて来ない。吹きつける

乾いた風が、頬ほおをじりじりと灼やいていく。

依守いず也やは情けない顔で溜息をついて、港で買った
衣ころもを頭から被り直した。長い袖そでと裾すそ、頭まで覆おほう
その衣は、何の飾り気もない粗い布で作られている。
環天かんでんのくに之国の強い日差しから身を守るための衣装だ
と聞いたが、ごわごわとした布は肌はだに馴染まず「体
だけは無駄にでかい」と上司や同僚から陰口を叩か
れる依守いず也やには少々きつくて動きづらい。

港から馬に揺られて二日。目指すは「北の災獸さいじゅう
廟びょう」と呼ばれる建物だ。吹く風により刻々と変わ
って行く砂漠に固定された道などあるはずもなく、
案内なしには辿り着くことが難しいため、朝のうち
に迎えが来ることになっていた。港の商人が前もつ
て繋つなぎをつけておいてくれたのだ。

ところが、太陽が中天近くまで移動した今になつ
ても迎えは現れない。

「場所……間違えたのかなあ？」

不安になって、首から提げた布袋から一枚の地図

を取り出した。

地図には、待ち合わせの目印として、牛が蹲うずくまっているような形の岩が描かれている。それとよく似た岩が近くにあることを何度も確認して、依守也は短い黒髪を苛々とかき回した。

「環天かんてんの奴らっていい加減だつて聞くけど本当なんだなあ。ほら、港に着いた時もさ、旅券の確認したの露店のお婆さんだつたらう？　なんで関所作つて役人置かないんだよ。頭おかしいよ」

依守也は口を尖らせて、布袋の中を覗き込んだ。そこには旅券や渡航許可証とともに、災獣廟に着いたら責任者に渡す大切な書簡が入っている。

「それにしてもこれ……困つたな」

額ひたいに手を翳かざして陽光を遮さへぎりながら、栗色の馬の背にくくりつけた羊の皮の水筒を見つめる。これなら水を冷たいまま保つからと法外な値段で買わされたのだが、二日経つた今、すでに中身は一滴もない。

環天之国は国土のほとんどが砂漠だと聞いている

が、来る前に想像していたほどの暑さを感じない。

依守也が生まれ育つた薙古なぎふるのくに之国特有の、内側から身を腐らせるような蒸し暑さとは違つて、からりとした気候は風が吹くとさわやかに思えるほどだ。

しかし、とにかく喉が渇く。馬の背に振り分けたもうひとつの水筒に手を伸ばしかけて、慌てて隣を見た。

そこには、彼の相棒が行儀良く座つていて、黒い瞳で彼を見つめていた。きよとんと首を傾かしげ、少し不安そうな声でくうと鳴く。途端に依守也は口元を緩めてその首に抱きついた。

「嘘うそだよ、太た於お。お前のぶんまで取らないよお」

太た於おは巨大な雄犬だ。後ろ肢あしで立ち上がれば、六尺約百八十七センチメートルを悠つやに超える依守也の背丈とほとんど変わらない。艶つやのある茶色い被毛の下では筋肉が波打ち、太い四肢と鋭い爪つめは獠どうろう猛もうな肉食獣のそれだが、ちよこんと垂れた耳とつぶらな瞳にはなんとも言えない愛嬌あいきょうがある。

長い舌をだらりと垂らして忙しなく息をする太於に、依守也は「ごめんなあ」と囁いた。

「喉渴いただろう？ 水飲もうな」

布袋から薄い鑄物の器を取り出し、水筒の中身を空ける。器を半分ほど満たすと、水筒の中はすっかり空になった。

太於が、飲んでもいいの？ と上目遣いに依守也を見る。

澄んだ瞳に依守也の顔が映っていた。もともと眉も目尻も下がりで、自分で少し情けないなと思ふ顔だが、今、太於の瞳の中にある己は途方に暮れていてものすごく情けなく見える。

「……気にするな。飲めよ。俺のおごりだ」

上司がたまに飲み屋に誘ってくれる時の口ぶりを真似て、依守也は太於の顔の前に掌を広げて見せた。太於が目を輝かせて、掌に大きな前肢をぱんと合わせる。

「よしっ」

その言葉が終わらないうちに、太於は器に顔を突っ込み、猛烈な勢いで水を飲み始めた。

弾け飛ぶ飛沫が日の光を反射しながら砂礫に落ち、じゅっという幽かな音を残して蒸発する。

依守也はほんやりとそれを見つめ、何気なく自分の額に手をやった。汗をかいていない。首筋も胸も、さらりと乾いている。

——気をつけなよ、お役人。環天の空気はからっからだから。俺たちの国のように蒸し暑くないからって油断していると、知らない間に体中の水分を持つていかれて……死ぬぞ。

港で出会った、渡真利という名の薙古の商人の言葉を思い出して、依守也ははっと太於を見た。

「な、なあ太於。まずいかもしれない。早く迎えが来ないと俺たち……」

言いかけた言葉を呑み込んだのは、地響きを感じたからだ。幽かだが確かな大地の震動。何か巨大な力が近づいて来る音。

……地震？

咄嗟とつさに太於の器を袋に押し込み、辺りを見渡す。

ここは雑古ではない。地震なんて起こらないはずだ。そう自分に言い聞かせ、太於の背中をゆつくりと撫でてやりながら耳をそばだてた。

どどどど、と地響みはきが近づいて来る。北の方角だ。首を巡らせて思わず目を眩みはる。

赤い地平線が波打っている。その波は徐々に大きくなり、やがて空を覆うほどの巨大な赤い壁となつて立ち上がった。

「え？ 何あれ。……砂嵐……か？」

環天しづめち之国では、ごくまれに「死の熱風」と呼ばれる灼熱しづめちの砂嵐が吹くことがあると本で読んだ。それに巻き込まれると、生き物は一瞬のうちに干からびて死ぬのだそうだ。

慌てて立ち上がった時、太於がぐうと唸り声を出げた。頭を伏せ、太い尾をまっすぐに立てて威嚇いかくの姿勢を取る。短い毛が逆立ち、近寄りがない殺気が

みなぎ張った。

「何？ 太於、何っ？」

布袋を抱きしめて依守也は後ずさる。太於は後ろ肢で盛んに砂を蹴り、近づいて来る砂嵐に向かつて太い声で吼ほえ立てた。

「よせ。逃げよう。あっち、あの岩。な？」

後方の巨岩を指差しながら、依守也は裏返つた声で訴え、筋肉の固く張り詰めた太於の腿ももを叩く。

太於は雑犬なまいぬという雑古之国特有の犬だ。人間の住める土地と震魚しんぎよ之懐ふところを隔てる砦山脈とりでさんみやくにのみ棲息する。群れを作つて野の獣を狩る獍猛な肉食獣である。

主あるじと認められた人間には忠実でその近親者にもなつかが、一度狩猟本能を取り戻すと人の手には負えなくなる。

太於は一年前に依守也と暮らし始めてからずっと大人しく穏やかだったのだが、こうして牙と殺意を剥むき出しにするさまを見ると、急に恐ろしくなった。

そうこうしている間に、赤い砂の壁は依守也の三町（約三百メートル）ほど先に迫っていた。もはや逃げられる気がしない。

恐怖のあまり涙声になりながら太於の名を呼ぶが、太於は振り返ろうともしない。

その時、西から吹きつけた風が砂の壁を乱し、黒い影を浮かび上がらせた。ひとつ、ふたつ……もつとずつと多く。数百……いや数千とも見える馬とそれに跨またがった人々の群れだ。

先頭に躍り出た男が、鞭むちを振り上げて馬の尻を打つ。光沢のある漆黒シツクの馬は、一声嘶いないて加速した。

みるみる近づく馬を前に、依守也はなすすべもなかった。日の光を照り返して輝く馬の黒い胸に目が釘付けになる。太於がいなくなり、いつの間にか自分の馬が走り出したことにも気付かなかった。

「危ねえぞこの野郎！」

男が叫び、黒馬が砂礫を蹴って跳躍した。

悲鳴を上げることすらできない依守也の頭上すれ

すれを、馬の腹があつという間に通り過ぎる。

「おい、馬鹿がいるぞ。踏んでやれ！」

遠ざかる蹄ひづめの音とともに、男の声が響き渡った。

それに応える太い声がいくつも重なり、依守也の両脇を何頭もの馬が怒濤どとうのように駆け抜けた。

咄嗟に頭を抱え、地面に突つ伏す。目を閉じて、凄まじい数の馬が体の横を走り抜ける震動が全身を震わせる。

ぎゅつと体を縮めて祈った。

踏まないで。どうか踏んづけないで。

馬たちが蹴り上げる熱い砂が鼻からも口からも容赦なく入るが、そんなことを気にしている場合ではない。いつ蹄に蹴られて、もしくは踏み潰されて骨が碎けるかと思うと生きた心地もしない。袖や裾が踏みにじられて引つ張られるたびに心臓が止まりそうになる。

気が遠くなるような長い時だった。

辺りが静まり返っていることに気付き、依守也は砂に埋もれた体を起こした。犬のようにぶるりと体を揺すって砂を落とし、おずおずと立ち上がる。馬や人の姿はどこにもなく、そこにはただ赤い砂漠が広がっていた。

「た……お……」

掠れた声で呼ぶ。喉に砂が入り激しくむせた。滲む涙を拳で乱暴に拭った時、異変に気付いた。

景色が歪んでいた。まるで透明な水の中を覗いているかのように揺らいで、少し先の地面が銀色に輝いて見える。蜃気楼だ。

先ほどまでのからりとした空気とはまるで違っていた。体を圧迫するような熱気で息もできない。衣から覗く手や顔の皮膚が耐え難いほどに痛み出した。まるで、火で炙られているかのようだ。

しゅうつつという音がしたかと思うと、目の前の大群に踏み荒らされた草がみるみるうちに枯れていっ

た。

辺りに散らばった馬糞が盛大な湯気を上げ、やがて地面そのものが蒸気を噴き上げ始める。

耳鳴りと動悸に襲われて、依守也は砂に膝をつく。目が回る。砂についた掌が赤く灼け、みるみるうちに水ぶくれになる。

——死ぬぞ。

耳に蘇った声が、一瞬だけ背中に冷気を送った。その時、地面が幽かに震動した。いくつもの蹄の音が、頭の中で反響しながら近づいて来る。

何だろうと思う間もなく、馬に跨った人々に取り囲まれた。皆一様に日よけの衣で頭と体を覆っており、顔を窺うことはできない。

「あんな、何やってるの？」

中の一人がそう言った。酷い耳鳴りのせいでもって聞こえるが、確かに女の声だ。

「こんな所に座り込むなんて、あれが見えないのかい？」

白と茶のまだらの馬に跨ったその女は、長い袖から突き出した指で北西の空を示した。それを目で追って依守也は呆然と目を見開く。

日輪があつた。驚いて南を見る。そこにも日輪。

太陽が……二つ？

なんだあれ？ という思いを込めて北西の空を指差す人物を見上げる。「わからないの？」という苛立つた声が返つて来た。

「焰馬えんばさまじゃないか！」

えんば……えんば、えんばって何だっけ？

霞かすみがかかった頭を必死で動かして、依守也はぐふと喉を鳴らした。

焰馬。環天之国の災獣だ。

国の四方にある災獣廟を季節ごとに移動して、国土をまんべんなく焼き尽くすという灼熱の馬。

「ちよつと、それどうする？ 拾う？」

「とりあえずね。さあ行こう。私らも危ないよ」

掴つかまりな、と白馬に乗った女が手を差し伸べた。

その腕は、女とは思えないほどに筋張つて逞たくましい。それに縋すがりかけて、依守也は「いぬ……」と掠れた声で訴えた。

「いぬ……おれの……どこ？」

「犬う？」

薄茶色の馬に乗った小柄こがらな人物が身を乗り出す。

「犬がいるの？」

「み……見失つて……」

「いなくなっちゃつたの？」

「運良く見つけたら拾つてやるよ。もう危ないって。」

……族長っ！

依守也の腕を掴んだ女が声を張り上げ、北の方角へと頭を巡らせた。

女の視線の先、陽炎ゆらめく広大な赤い砂漠に、真つ赤な馬うまが佇たなずんでいた。その背に一人の女が跨つている。

声を聞かずに女とわかつたのは、彼女が他の人々と違って日よけの衣を被つていないからだ。

赤みがかった長い髪が、馬の尾のように結われて
ほっそりとした背で揺れている。

あの女は何を見ているのだろう？

赤い馬に跨った女がゆっくりと振り返る。

その刹那、世界がぐらりと揺れて目の前が真っ白
になった。

第一章

体が揺れている。不安定にぐらぐらと。
地震だ。

泥のような眠りの中で依守也は思った。

また震魚が暴れている。

——上から沙汰が出たぞ。

男の声が聞こえた。夢の中の白い霧に包まれたような景色の中に、椅子の背もたれにふんぞり返り、机の上で行儀悪く足を組んだ男の姿が現れる。三十半ば過ぎの、依守也に比べれば小柄で細身の男だ。

阿麻名という名の依守也の上司だ。彼は、伶俐な印象の切れ長の目を細めて、不愉快そうにやすりで手の爪を磨いていた。

——お前さ、この間、環天の燃料問題についての

議会の時に斗具留議長に指名されて発言したんだって？ 馬に近づく方法があるとか何とか。

環天之国の燃料、と言えば焰油のことだ。

焰油は、焰馬の汗が地中に溜まったものと言いつえられている。燃焼時間が長く有毒な煙も出ない非常に優秀な燃料なのだが、環天の民は何百年もの間、夜を照らすためにひっそりと使ってきた。

それに目をつけたのが薙古の先代の国主である。

先代の国主は焰油の存在を知るや環天から取り寄せ、北の律花之国に売り込んだ。律花之国は一年のほとんどを雪に閉ざされる寒冷な土地だから、効率の良い燃料はひどく重宝された。金儲けの匂いを感じた先代国主は、環天之国に自国の災獣からの賜り物……碎魚を貸すことを提案した。

碎魚は震魚の稚魚で、巨大なウツボのような形をしている。どれほど強固な岩盤をも打ち砕き、地中を自在に進む能力を持っている。つまり、地下に莫大に埋蔵されているであろう焰油を採掘するにはう

つてつけの道具なのだ。

こうして薙古は、採掘の技術を提供する見返りに、焰油の利益の半分を自分たちのものにしてきた。薙古にとって相当に都合の良い取引のだが、環天の国主はそれに対して今まで不満を唱えたことがない。一年前、薙古之国では大規模な噴火が起こり、国土に甚大な被害を受けた。さらにその混乱に乗じて食料庫にしていた神槌之国で反乱を起こされ、大変な危機に瀕している。

最後の頼みの綱が焰油の貿易による利益だった。

ところが最近、採掘量が極端に減っており、打開策が検討されていた。議論が行き詰まる中、議長に発言を求められたのが、議事録を取る役目を任されていた依守也だった。

本来ならば、一介の記録係が意見を述べることなどありえない。

——す、すすすみません。なんかちよつと眠くてほうつとしてる所に声をかけられたのでつい……。

ふうん、と阿麻名は不機嫌そうにうなずいた。

——俺が非番の時にまたえらいことやらかしてくれたな。

——も、もしかして、上の方々が怒っておられる……とか？

依守也は、上目遣いに上司の顔を窺った。阿麻名は長靴を履いた長い足を組み替えて綺麗に整えられた眉を寄せる。

——採用だとよ。お前の案を実行するそうだ。

え？ と依守也は目を瞠った。

——で、では、あの一件はもう……お、お咎めなしということ……。

身を乗り出した依守也を阿麻名は険しい顔で睨んだ。調子に乗るなよ、と低い声で呟いて一枚の書類を投げて寄越す。

——辞令だ。お前を環天の焰油問題の責任者に任命する、とさ。

——ほ……本当ですか？ で、では、あの、さつ

そく草案をまとめまして提出を……。

——そんなまどろっこしい真似はしなくていい。

阿麻名は磨いた爪を確認するように目の前に手を翳^{かき}した。

——議長から、お前を環天に派遣してもかまわないかと打診があつた。だから返事しておいたよ。一刻も早く私の目の前からあの馬鹿を消し去つて下さいって。

——え？ え？ え？

依守也は阿麻名の整つた顔を見つめ、周囲を無意味に見回した。

——ちよ、ちよつとお待ち下さい。派遣というのは……環天に行けということですよね？

——そうだよ。さつさと行つてくれよ。向こうの責任者にはもう書簡を送つてあるらしいから。

——そ、そそそそんなあ！

顔から血の気が引くのを感じながら、依守也は阿麻名の背後の壁に貼られた五つの島国の地図を指差

した。

——か、環天の民つて、中央の都に住んでいる金持ち以外は、まともな教育を受けていないのですよね？ 議論なんて通じなくて、気に入らないことがあるとすぐに暴力に訴えるのですよね？ とつても怖い人たちなのですよね？

——俺はお前の方がよっぽど怖いよ。何で何ひとつまともにもできないくせに俺の足を引つ張ることだけは一人前なんだよ。

ふつと爪に息を吹きかけて、阿麻名は机から足を下ろした。

——環天の民なんぞ怖がつている場合じゃない。上の連中は秘密にしているが、最近神槌^{かんづち}と環天の海域の境に雷獅子^{らいじし}が現れたらしくてな。

——……雷獅子が？ なぜですか？

——環天の方角に向かつてとんでもない勢いで吼^ほえたつていうから、焰馬に喧嘩^{げんか}を売りに行つたんじやないのか？

——喧嘩？

——あの雷獅子はな、芳巻よしまきの……ほら、しよつちゆう海域ぎりぎりまで来るつていう馬鹿鳥、あいつに噛みついたことがあるつて龍神の民の間で噂うわさされているらしい。どこまで本当だかわからないが、うちの大将と前の国主をやつつけるのに国城くにしろごとぶつ潰したつて話は知つているだろう？ 気性が荒いんだよ。

——しかしそのような恐ろしい災獣なら、いくら新しい国主が国の復興ふっこうに励んでも神槌かみづちはおしまいではありませんか。

依守也の顔は思わず緩んだ。「ざまあみろ」という思いが湧き上がる。阿麻名はつまらなそうに口を歪めた。

——ま、後になつてうちに支配されていた方がましだったと気付いて国主が泣きついて来てても遅いつて話だわな。……それはともかく、雷獅子が暴れまわるせいとか、最近海が荒れて船の航行に支障が出て

いるらしい。運良く優秀な潮読しおよみのいる船に乗ればいいが、そうでなければ生きて環天まで辿り着けるかどうか……辿り着けないだろうなあ。

ええつ？ と依守也は悲鳴を上げた。

——そ、それでは死に行くようなものではありませんか！

——そうだよ。けつこうな確率で死ぬんだよ。だからお前なんだよ。この国難にこれ以上優秀な人材を失うわけには行かないだろう？

そんな……、と依守也は力なくしゃがみこんだ。それを睨みつけて、阿麻名は椅子から立ち上がる。

——俺が非番の時に余計なことするからだ。斗具留議長がお決めになったのならもう……俺には覆しようがないんだよ。

諦めろ、と告げる声が僅かに震えた気がして、依守也は顔を上げた。言葉は辛辣しんろうだがいつも最後には依守也を庇ってくれる上司だ。今度もきつと助けてくれるだろうと期待を込めたのだが、阿麻名はくる

りと背中を向けた。

——安心しろ。お前だけじゃない。この国はもう
じき……だ。

え？

依守也は首を傾げる。

今、阿麻名さまは何と言ったのだろう。

尋ねようとした時、下から突き上げるような衝撃
に襲われた。

* * *

目の前にいた阿麻名が消えた。代わりに大型船の
船楼が霞の中に現れる。

——ねえ、その犬を撫でてもいい？

少女にそう話しかけられたのは、依守也が船酔い
で憔悴しきっていた時だった。

雑古の港を出て環天へ向かう間、海はうねり狂っ
ていた。何度も高波に晒され、船体を破損し漂って
いた連絡船は、幸運なことに近くを通りかかった貿
易船によって助けられた。

その船は「龍神船」と呼ばれていたが、特徴であ
るはずの龍神の頭像が舳先になかった。だが、親切
なことに、難破しかけた連絡船を雑古と環天の境界
の波のおだやかな場所まで導いて、船の修理まで手
伝ってくれたのだ。

依守也に話しかけてきた少女は、その龍神船から
様子を見に来たらしかった。

船旅五日目でもう吐くものもなくなっていた依守
也は、心配そうに寄り添う太於にもたれて、死んだ
魚のような目で少女を見上げた。

依守也の答えを待たずに、少女は膝を折って太於
の背中をそうつと撫でた。太於がじつと動かないと
わかると、顔を綻ばせて首の周りのたつぷりとした
毛皮をふかふかとかき回す。

——おい……。

依守也はむかつく胸を押さえて声を絞り出した。

——後ろ肢と尻尾の先には触るなよ。

少女は小首を傾げた。まだ十五、六のよく日に焼

けた小柄な少女だ。紐で縁取られた丈の短い着物の裾からすらりと伸びた足を惜しみなく出している。顎の辺りで切り揃えた髪が強い海風を受けてふわりと広がった。

——どうして？

——嫌がるんだ。そこ触られるの。

太於の毛皮は茶色いが、右後ろ肢と尻尾の先だけは黒い毛に覆われている。太於はそこを誰にも、依守也にも触らせたがらない。

少女はふうんとうなずいて、今度はまじまじと依守也を見た。

——震魚の民って、しょっちゅう足元が揺れているくせに波の揺れには弱いよね。

依守也が顔をしかめると、少女はたいして豊かではない胸を反らした。

——あなた、この犬以外に連れがないようだけれど、環天之国に何の用なの？

——お前に関係ないだろう？

——あら、関係あるのよ。

船酔いの状態でなければ可愛らしいと思えたかもしれない小さな唇を尖らせて、少女は依守也を睨む。

——これ以上焰馬の民に迷惑をかけるのはおやめなさい。諦めて自分の国の災獣と仲良くなさいな。神槌にいたお仲間だつて新しい雷獅子に追い出されたのでしょうか？

依守也は無言で少女を睨んだ。少女は臆することなく、むしろ挑むような目で依守也を見据える。

——あなたたち、もう神槌には近づけないわね。あの子はとても強いもの。

——あの子……？

依守也の問いには答えず、少女は勝ち気そうな瞳を海へと向けた。

——あなたのその船酔いはね、自業自得なのよ。最近龍神さまの海が荒れるのは震魚の民のせいだもの。だからせいぜい苦しみなさいな。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。